

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04447

研究課題名(和文)戦後における漢文教育実践史の研究

研究課題名(英文)Study on the history of Chinese culture education lessons in Japan after Second world war

研究代表者

渡辺 春美(WATANABE, HARUMI)

高知大学・その他部局等(名誉教授)・名誉教授

研究者番号：10320516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究の目的は、戦後漢文教育実践史、漢文教育論史、漢文教育課程史の研究と漢文教育実践の改善にあった。

では、特色を、昭和20年代 経験主義に基づく漢文教育、昭和30年代 主体性を生かし能力を育成する漢文教育、昭和40年代 主体性を生かし、能力育成と心情陶冶に資する漢文教育、昭和50年代 日本文化の理解に資する漢文教育と捉えた。この研究は、漢文教育思潮史としてまとめた。その展開は、整備期(昭和20～26年)、多様期(27～30年)、収束期(31～40年)とした。は、実践史を発展的に生かし、小・中・高の授業研究も行った。成果は、報告書『漢文教育の創造』として刊行した。

研究成果の概要(英文)：This study is composed of a history of postwar Chinese literature education practice in Japan, a history of the education theory, a history of the education curriculum and improvement of education practice.

In the study of , the characteristics are as follows. The education based on empiricism in Showa 20's, the education to cultivate ability with self-directed efforts in Showa 30's, the education to build ability and rich mind in Showa 40's, the education that contributes to understanding Japanese culture in Showa 50's. The study of and are integrated as the history of trend of thought and theory on the education in Japan. It was categorized into the developmental period (Showa 20 to 26), the diverse period (27 to 30 years), and the convergence period (31 to 40 years). In the , lesson researches based on the history were conducted on elementary, junior high and high school. The results of the study were published in a report.

研究分野：国語教育学

キーワード：漢文教育 漢文教育実践史 漢文教育思潮史 漢文教育の創造

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 漢文教育における学習者の否定的意識

漢文学習に否定的な回答をする学習者は、依然多く、増加傾向にあると見える(平成17年度高等学校実施状況調査参照)。言語文化の基盤としての漢文教育の改善は、今日の伝統的な言語文化としての漢文教育の切実な課題である。本研究は、漢文教育改善の課題に関わる基礎的な研究として位置付けられる。漢文教育の構想は、基礎的研究に基づいて行われる必要がある。

### (2) 漢文教育実践の史的把握の必要性

漢文教育は、戦後を取ってみてもすでに70年を超える歴史がある。しかし、漢文教育に関する歴史的研究は、近年やっと着手され始めたに過ぎない。とりわけ、漢文教育実践史の把握と考察は、ほとんどなされることなく今日に至っている(注1)。漢文教育は、授業実践によって現実の場に立ち上がる。授業実践の報告は、その臨床的な記述である。授業実践を史的に位置付けることは、実践の史的評価に関わる。実践史研究がなされていないことは、実践の成果と課題を明確にしていることにほかならない。学習者の否定的意識は何によるのか。その改善はどのようにすべきなのか。時代を切り開いてきた、今日に生きる優れた実践を継承、発展させていくためにも実践を史的に把握する必要がある。漢文教育の構想も史的研究を踏まえてなされるべきである。

### (3) 漢文教育の学術的背景

漢文教育の研究に関しては、鎌田正編『漢文教育の理論と指導』(1972年 大修館書店)がある。これは、漢文教育の目標・教材・指導法・訓読・漢文教育史に分けて編成されている。また、長谷川滋成に漢文教育に関する一連の研究がある。『漢文教育序説』(1979年 第一学習社)、『漢文の指導法』(1981年同)、『漢文教育論』(1984年 青葉図書)、『漢文教育史研究』(1984年 同)である。さらに、江連隆『漢文教育の理論と実践』がある。ここに述べられた漢文教育論は、その異同を明確にし、史的に位置付ける必要がある。漢文教育史の研究もなされてはいるが、概説であったり、明治期から昭和戦前期が中心であったりと本格的な漢文教育史とするには十分ではなく、戦後における漢文教育史の研究は、本研究の成果に待たねばならない。

漢文教育実践を集大成したものに、佐野泰臣『漢文の教え方』(1984年 右文書院)、『漢文教育考 その指導と実践』(1978年 教育出版センター)、『漢文の世界 漢字・漢文教育の考察』(1984年 徳島県教育会)があり、また、江川順一『最北端の漢文教室から』(1997年 大修館書店)などがある。これらは、漢文教育実践史を構成する、有力な対象となるものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の4点にある。まず、

戦後における中・高等学校の漢文教育実践を史的に位置付け、漢文教育実践史を明らかにすることにある。また、漢文教育実践を支えた時代の漢文教育論(漢文観・漢文教材観、目標論、方法論)を史的に把握する。ついで漢文教育課程を史的考察する。その上で、言語の教育としての国語科、および国際化・情報科社会の観点から成果と課題を明らかにし、将来にわたって求めるべき、中・高等学校における伝統的な言語文化の教育としての漢文教育を新たに構想し、カリキュラムを作成する。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究の組織

代表の渡辺春美は、研究の統括を行うとともに、古典(古文)実践史研究の実績を活かし、漢文教育実践史の研究を担当。研究分担者の吉田茂樹は、指導主事の経験により学習指導要領に精通しており、漢文教育課程史を担当する。また、研究分担者の富安慎吾は、これまでの戦後における漢文教育思潮史の研究業績により、漢文教育史(意義・目標・方法論)を担当する。

### (2) 方法

文献による歴史的研究を主とし、併せて漢文教育の授業研究も行う。

平成27年度は、まず、基礎調査段階として、漢文教育実践・漢文教育論・漢文教育課程に関する文献目録を作成する。文献を収集・調査し、史的研究の枠組み(時期区分・主要文献の選定)を作成し、のすり合わせを行い、考察に着手する。平成28年度は、文献収集・調査を充実させるとともに、時期区分にしたがい、主要文献による歴史研究を進める。研究の進展に従い、主要文献の他の文献にも留意し、時代の成果と課題をとらえた史的研究を行う。また、成果と課題を検討し、アクティブラーニングに基づく新たな漢文教育の方向を探る。平成29年度は、の歴史研究を深めるとともに、将来に亘って求めるべき漢文教育を意義・目標・方法という点から検討を深め、中・高等学校における漢文教育の構想をカリキュラム試案として提出する。28・29年度と研究の成果を学会で発表する。

## 4. 研究成果

### (1) 漢文教育思潮史

漢文教育論史・漢文教育課程史を統合して漢文教育思潮史としてまとめた。本思潮史の研究では、漢文教育観の典型性の成立過程を中心に史的把握し、その後の展開についても言及した。

漢文教育観の典型性は、次の3点である。  
授業編成の典型性 読むことの領域で現代文・古文・漢文が独立。教育内容の典型性 漢文を訳読する力の習得の重視。テキスト形態の典型性 形態が「訓点文」に固定。これらの成立は、戦後の整備期(昭和20年

～昭和26年）・多様期（昭和27年～昭和30年）・収束期（昭和31年～昭和40年）に分けて辿られ、昭和30年代半ばとした。その成立は、必然性になく「偶有的」であった。しかし、漢文教育の典型性は、この昭和20年を思潮史の起点とする時、30年代半ばの成立で「偶有的」と見えるのであろうが、昭和20年以前に成立していた可能性もある。起点を遡った追求も今後の課題である。また、漢文教育において根強い人間性陶冶観（道徳性・民族性・豊かな人間性等）の漢文教育思潮史における変遷も、解明を求めたい課題である。漢文教育の典型性に対しては、克服する試みが少なからず存在している。それらをカリキュラムとして具体化していくことが今後必要である。そのためにも、漢文教育観（漢文観・目標観・教材観・方法観等）の検討が必要になる。

## (2) 漢文教育実践史

昭和20年代から50年代の実践の一般的な実態を把握するのではなく、漢文教育を切り開く、時代の特徴的な実践を取り上げ、記述することを目的としている。その結果、次のことが見いだされている。

### 昭和20年代の漢文教育実践

経験主義に基づく、昭和26年版学習指導要領によって興味・関心重視の言語生活に結ぶ漢文教育が提唱されたが、昭和27年の「東洋精神文化振興に関する決議」を経て、読解・鑑賞能力と「豊かな心情」の両面を育成する漢文教育への展開が始まった。「豊かな心情」の育成には、道徳・民族教育としての漢文教育の投影が見出される。

この時期の漢文教育実践論考は、26年版学習指導要領に基づく研究授業の報告が多くなされている。授業者の主導による授業が多いが、旧来の訓詁注釈中心の漢文教育を改め、経験主義に基づき、学習者の興味と関心を重視し、班別学習を計画し、主体的な言語経験の場を与え、調べ学習、比較による理解の深化、劇化による創造的な内容理解の学習指導を通して、日常生活、実際社会の中にみられる現前の問題として考えさせる授業を試みている。新たな授業モデルが模索されていたと見ることができる。

### 昭和30年代の漢文教育実践

30年版学習指導要領は、学力低下批判を受けて改訂された。30年度版学習指導要領から35年版学習指導要領に至り、漢文教育は、言語生活に結ぶ漢文教育から、読解・鑑賞能力と「豊かな心情」の両面を育成する漢文教育へと展開した。この「豊かな心情」の育成には、道徳・民族教育としての漢文教育が投影されている。また、漢文を豊富に学習させるために、「書き下し文」の使用も考慮すべきとしている。

漢文教育実践においては、経験主義に基づく漢文教育実践もなされていたが、しだいに能力主義に基づく鑑賞力の育成と心情陶冶の漢文教育がなされるに至っている。学習者

の実態と興味・関心に基づく主体的な学習は30年代にも引きつがれ、さらに鑑賞力、批判力等の能力育成が意識されている。学習者による教材の選択、発表、創造的表現、交流が授業に取り入れられ、教材を基にした創作・批評活動が行われた。発展としての創作ではなく、創作活動を通して理解を深めることが試みられた。例えば、漢詩を教材とした実践においては、鑑賞力と美的情操を高める漢詩教育が求められた。旧来の教師中心の指導の効果に疑問を呈し、生徒中心の主体的学習による創作活動を通して鑑賞を深める学習を、教材の選択・訳詩の創造・発表・交流という学習活動を通して行い効果を上げている。一方、教材の開発・編成、漢字・漢文の言語的難解さの克服法、学習者主体の授業方法の開発、生活問題意識の喚起と、それに基づく主体的学習、読みの能力及び認識の深化の方法等に課題を残している。

### 昭和40年代の漢文教育実践

昭和40年代は、深刻な社会問題を抱えつつ発展・変化した時代である。35年版学習指導要領を発展させる形で、昭和45年に高度経済成長とそれを支える能力主義を反映する学習指導要領が改訂され、漢文教育においては、能力主義に基づきつつ、心情を豊かにし、わが国の文化とその形成過程の理解が求められた。発展・変化の時代にあって漢文教育を問い直す動きもあり、また、新たな漢文教育の方法も模索された。江連隆は、漢文教育の構造化を追究し、教材の精選、読みのスキル、漢文読解の知識、漢文読解のための技能の明確化と構造化を求め、指導形態・指導方法の改革を促した。井関義久は、形式操作的読解に終始し、主体的な価値追究に技能を持って向かわぬ漢文教育を批判し、分析批評を導入しようとした。

漢文教育実践の考察の結果は、以下の通りである。入門期の指導については、多くが基本事項の学習 漢文の読解・解釈・鑑賞と段階的に展開するのに対して、学習者の興味・関心を重視し、基本事項の学習＝漢文の読解・解釈・鑑賞とする同時・一元的な展開による実践も行われた。また、新たな漢文教育方法も開発された。情報機器を活用し、グループ学習を用いた実践によってすぐれた成果が納められた。分析批評の提案は、学習者の主体的読みの追究において意義あるものの、実践はなお試行に留まっている。新たな教材開発・編成については、テーマに基づく教材編成と授業展開が、学習者の問題意識を喚起し、理解の質と速度を高めるとする実践がなされ、それは昭和60年代・平成年代の新単元学習につながるものとして意義がある。また、日本漢文教材の開発・編成、グループ学習と解釈の方法は、すぐれた成果といえる。

課題については、漢文教育論争によって提出された問題、江連隆による漢文教育の内容・方法の明確化・構造化、読解・解釈の方

法（井関義久の分析批評の理論と方法）等の発展が挙げられる。

#### 昭和50年代の漢文教育実践

昭和50年代は、40年代から続く社会問題・教育問題を背景に、学習指導要領の改訂によって、豊かな人間性の育成を目指し、基礎・基本と個性重視のゆとり教育を求めることになった。国語科は教科構造を二領域一事項に変更され、言語の教育としての立場を進めるに至った。高等学校において古典（漢文）は、初年度および次年度において「国語」の中で、総合国語の中の古典（漢文）として、現代の言語生活と関連させた指導が期待された。

中学校の漢文教育実践においては、学習者中心の主体的学習の展開が見いだされた。主体的な表現と理解の関連学習として、訳詩とグループ学習を通じた漢詩の理解を深める実践がなされた。また、教材研究を深め、学習者の漢文に向かって立ち上がる、内容への関心による学びの意欲を深いところから喚起する試み、教材を開発・編成して関心・問題意識を喚起し意見の交流を通して理解を深める指導もなされている。

高等学校の漢文教育実践は、教材開発・編成を行い、昭和53年版学習指導要領における、日本文化の特質や日本と中国との文化の関係理解（「古典」の指導事項の「力」）に関係づけられる実践が見られた。また、総合国語の中の古典（漢文）として、現代の言語生活と関連させた指導としての主題単元学習につながる実践も見いだされた。

また、本研究では、漢文教育に長く問題意識を持続して取り組んだ個人を対象とする「個体史研究」（注2）にも取り組んだ。個体史研究では、清田清・佐野泰臣・長谷川慈成を対象とした。その内、清田清は、時の権力に左右されない普遍的漢文教育を学習者の主体性と創造性を生かして行った。佐野泰臣は、グループによる主体的学習を情報器機を活用して追究し、成果を上げた。

#### (3) 漢文教育の構想

授業は、「教える」から「学ぶ」「学び合う」へと確実に変わっていると考える。生徒が自らの問題意識を大切に、仲間とともに考え、問う力を育む漢文教育のあり方について考え、「対話をテーマ」とした授業を構想したい。中・高の実践を踏まえて漢文教育の構想について、次の5点を提案した。訓読の見直し 中学生が会える漢文は、できるだけ読みやすく理解しやすい訓読にする。教材選択の視点 深く考え、学びの広がる教材化の視点。メリハリをつけた学習 読み深めて技能や知識を身につける学習と、学びを活用した広がる発展的学習の促進。「実の場」に繋がる言語活動の中に位置づける 社会生活に必要な知識を実地に使う実の場のゴールを設定し、主題を基に現代文・古文を学習材とする学習の組み合わせの核に漢文を配置し、主題を追究することに関わらせて

漢文学習材の理解を深めさせる。漢文・古文・現代文と「文化」 漢文・古文・現代文のつながりを意識した学習により、総体としての言語文化の価値を認識する学習。

#### (4) 漢文教育実践

実践は、小学校・中学校・高等学校ごとに、報告した。

小学校（小野桂実践）は、漢文に親しむ子どもの育成を目標として、適切な「学習材」と「学習活動」のあり方を、授業をとおして追求し、成果を上げた。「論語」を教材とし、言語抵抗の削減、ワークシート、子供の発言の可視化と位置づけ、読みと思考を深める話題の提供、音読・暗唱等の工夫を行い、学習者の興味・関心を引き出し、理解を深めた。

中学校（大栗真佐美実践）は、「豊かな、魅力ある授業の創造」を求め、研究テーマとして、「人間の生き方について孔子の考え方を自分たちの生活と関連づけて考えようとする力をつける単元」を目指した。学習者は、「論語」の言葉を一つ選び、調べて現代語訳する。それを「未来の自分へ贈る言葉」として、グループで紹介し合い、もっとも共感された言葉が全体に発表されるというように展開し、成功に導いている。

高等学校（吉田茂樹実践）は、漢詩教材の授業において、「想像力を駆使してイメージ豊かに漢詩の世界を創り上げていく能動的な立場へと転換」する工夫として訳詩に書き換える学習指導を行い、成功を納めた。

ここに報告された漢文教育の実践は、その基本的なモデルが過去に見いだされる。三者の実践は、さらに新しい工夫を加え、実践を充実させたと見ることができる。

#### (5) 漢文教育文献目録

これまで発表されてきた目録としては、次のものを参考にすることができる。吉原英夫「漢文教育文献目録（札幌国語教育研究』11、2005、北海道教育大学札幌校国語科教育学研究室）」『収録範囲：明治27年（1894）～平成17年（2005）5月、土屋泰男「漢文教育文献目録（鎌田正【編『漢文教育の理論と指導』1972、大修館書店）』」『収録範囲：昭和23年（1948）～昭和46年（1971）5月、塚田勝郎「漢文教育文献目録（田部井文雄【編『漢文教育の諸相』2005、大修館書店）』」『収録範囲：昭和46年（1971）6月～平成17年（2005）5月。

これらの目録を踏まえ、本目録は、2006年から2015年に発表された漢文教育関係文献について収集し作成したものであり、現段階において収集できたものに限られている。

#### (6) 漢文教育の展望

##### 漢文教育の意義

漢文教育の意義を、A 言語認識とB 内容認識からとらえたい。Aは、漢文教育によって学習者の言語に関する認識が深められ、言語使用が豊かに改善されることによって生じる意義である。Bは、ものの見方・考え方・

感じ方が深まり、現代をよりよく生きる力になるときに生じる意義である。これは、先験的に意義があると考えのではなく、学習者の主体的、創造的な学びの結果によって生じる意義である。

#### 学習材

中国の古典の漢詩文、およびその影響下で作られた漢詩文のうち、わが国の社会・文化に影響を及ぼした漢詩文が学習材となる可能性を持つと考える。文学史によるよりも学習史によって学習材化がなされるようにしたい。

学習材は、学習者の発達段階、興味・関心・問題意識に基づき、豊かな学びを生み出すものを開発・選定・編成したいと考える。さらに、学習材は、学習形態や学習・指導過程に関わっても開発・選定・編成される。学習者の産出したものも学習材として授業効果を考えて用いたい。

#### 読む力の明確化

漢文を創造的に読む力は、これまで十分にとらえられて来なかった。主体的に学ぶ学習者の育成を考えれば、読む力を把握し、育成することは必要である。読む力を、知識・技能・態度に分けてとらえた。漢文を読む力を、音読と訓詁注釈に狭めるのではなく、読解し、解釈し、批評する力まで想定し、それらを備えた主体的な学び手を育成する必要がある。これらの漢文を読む力を教育課程に位置付けるとともに、各単元・各時の指導過程に組み入れ、繰り返し育成することが求められる。

#### 指導過程と指導形態

漢文の授業のどの時間を見ても、範読・音読 語義・句法の説明 口語訳の繰り返し、という指導過程を改めたい。指導過程を基本 応用 まとめ(ゴール) 発展と、発展的・段階的にする。この段階に一斉 班別 個別の指導形態を重ねる。学習者は、ゴールでの発表をめざし、基本段階で学習した技能を、班別による言語活動とおして応用し、自らの力で読み、班員と交流し、読みを深め広げ、あるいは修正しつつ、漢文を内化していく。さらに「発展学習」としての個別学習によって技能を個々に応用し着実に身につけるとともに、自らの認識も深めることによって内化を進める。教師は、指導過程の各段階で、学習者が生き生きとゴールを目指して学習し、認識を深め、古典の内化を図ることに加えて、技能を育成することを目標とする。学習者の学習目標と教師の技能目標を分け、二重構造化(注2)することで、学習者と教師のそれぞれが目標を明瞭に意識することができるようになる。このような段階的指導過程を、興味・関心・問題意識を軸に言語活動を組織化し、生き生きとダイナミックに展開し、学習を内発的にすることによって、技能を習得しつつ自ら古典を内化する学習者を育てたい。

#### 漢文教育実践の工夫

漢文の授業において、まず、学習者を学びの主体として位置づけたい。そのために次の点に配慮したいと考える。

ア 学習者を、創造的に漢文を学ぶ「主体」として学習指導を行う。

イ 学習者の実態に即した漢文の教材化を行う。

ウ 漢文学習材と学習者の出会いを演出し、興味・関心を育てる。

エ 学習者が主体的な活動を行い、表現を通して漢文学習材との関わりを強める言語活動の場を設ける。

オ 主体的な学び手の育成のために、学びの方法・技能を学ばせ、身に付けさせる場を設ける。

また、授業を活性化させるために、授業の要素として、ア 学習材化、イ 個別化、ウ 活動化、エ 協同化、オ 創造化、力発展化(指導過程の発展化・段階化)を取りいれたい。

(注1) 内藤一志「古典教育における実践研究」(『国語科教育学研究の成果と展望』全国大学国語教育学会編、2013 学芸図書)

(注2) 野地潤家「国語教育个体史の基本問題」(野地潤家『国語教育 个体史研究』1956年3月 光風出版刊 21頁)

(注3) 世羅博昭「『国語』『国語』における古典指導 生き生きとした古典教室の創造をめざして」(『国語教育研究』第29号 1985年6月 広島大学教育学部光葉会)

参考文献 渡辺春美・吉田茂樹・富安慎吾 編著『漢文教育の創造 戦後における漢文教育実践史・思潮史を踏まえて』(2018年3月 又ノタ印刷工房)

## 5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計5件)

渡辺 春美、漢文教育実践の展開 昭和40年代の『漢文教室』誌を中心に、九州国語教育学会紀要、査読有、7号、2018、135-146

DOI なし

富安 慎吾、漢文学習の学習内容を整理する枠組みについての試案、国語教育研究、査読無、59巻、2018、114-123

DOI なし

渡辺 春美、戦後漢文教育の展開 阿部吉雄の漢文教育論を中心に、九州国語教育学会紀要、査読有、6号、2017、207-218

DOI なし

渡辺 春美、戦後漢文教育个体史 佐野泰臣氏の漢詩の指導を中心に、語文と教育、査読有、31号、2017、16-27

DOI なし

渡辺 春美、戦後における漢文教育の展開 清田清の場合、九州国語教育学会

紀要、査読有、5号、2016、141-150  
DOIなし

〔学会発表〕(計8件)

渡辺 春美、漢文教育実践の展開 昭和40年代の『漢文教室』誌を中心に、九州国語教育学会、2017年9月9日~2017年9月9日、福岡教育大学

渡辺 春美、戦後における漢文教育実践の展開 昭和20・30年代の『漢文教室』誌掲載論考を中心に、全国大学国語教育学会、2017年5月28日~2017年5月28日、岩手大学

渡辺 春美、戦後漢文教育の展開 阿部吉雄の漢文教育論を中心に、九州国語教育学会、2016年9月10日~2016年9月10日、福岡教育大学

渡辺 春美、戦後漢文教育个体史 佐野泰臣氏の漢詩の指導を中心に、鳴門教育大学国語教育学会、2016年8月21日~2016年8月21日、鳴門教育大学

渡辺 春美、漢文教育史の展開 昭和50年代『漢文教育』誌掲載論考を中心に、大阪国語研究会、2016年7月10日~2016年7月10日、たかつガーデン(大阪市)

富安 慎吾、漢文教育実践史の検討 課題からの考察 2006-2015、全国大学国語教育学会、2016年5月28日~2016年5月28日、新潟大学

渡辺 春美、漢文教育史の展開 長谷川滋成氏を中心に、中国四国教育学会、2015年11月14日~2015年11月14日、岡山大学教育学部

渡辺 春美、漢文教育史の展開 清田清の漢文教育の場合、広島大学教育学部国語教育学会、2015年8月11日~2015年8月11日、広島大学教育学部

〔図書〕(計1件)

渡辺 春美、吉田 茂樹、富安 慎吾編著、ヌノタ印刷工房、漢文教育の創造 戦後における漢文教育実践史・思潮史を踏まえて、2018年、222

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

**6. 研究組織**

(1) 研究代表者

渡辺 春美(WATANABE Harumi)  
高知大学・名誉教授  
研究者番号：10320516

(2) 研究分担者

吉田 茂樹(YOSHIDA Shigeki)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授  
研究者番号：20737837

富安 慎吾(TOMIYASU Shingo)  
島根大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40534300